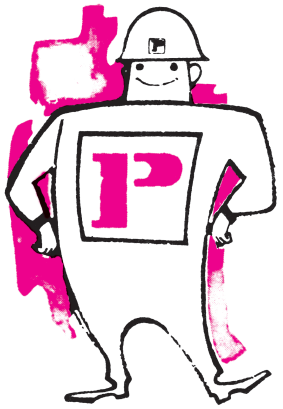


Plibrico News

No.470

◇２０２１年『全社で安全を考える日』を開催

ＡＧＣプライブリコは、７月９日にコロナ感染防止に十分配慮し、各拠点とWEB会議システムで結び対面とオンラインで『全社で安全を考える日』を開催しました。今年は安全第一を全うするためにも、職場やお客様と円滑に仕事をしていくうえでも欠かせない「コミュニケーション」をテーマとしました。

はじめに石橋社長から安全方針として、①個人の安全意識を「上げる」として、相手への思いやりを重視した“双方向コミュニケーション”を心がけることで本音が話せる、改善提案しやすい風土作りを目指す。 ②重篤災害のリスクを「下げる」として、災害の真の原因を把握し、適切な再発防止と未然防止策を取るという２点が示されました。

次に環境安全品質部の環境安全グループが「自分で考える安全活動」と題し、「自分ごと」として自ら考え安全活動をすることが大切であると提唱しました。また、環境安全品質部が推進中の「Welcome安全活動」(コミュニケーションの基本である挨拶や、思いやりをもって相互理解を図り、安全につなげる活動)を通して継続的改善をしていくことが必要であると呼びかけました。

特別講演は元ＮＨＫキャスターの牛窪万里子氏（株式会社メリディアンプロモーション代表取締役)を招き『仕事クオリティーの向上をはかるコミュニケーション』と題し、コミュニケーションスキルを身につけるために普段から意識するポイントについて、ワークを交えながら学びました。コロナ禍でコミュニケーション不足が懸念されている時期でもあり社員の関心は高く、行き違いが生じる原因や対処法を分かりやすく解説した講演は好評でした。参加者からは「相手に対して“何を伝えたか”ではなく“何が伝わったか”を意識したい」「すれ違いを防ぐには相手と自分の価値基準を知り、互いに歩み寄ることが大切だとわかった」など今後のコミュニケーション改善のヒントが得られ、職場で実践したいという感想が寄せられました。

◇ 研究部『セラミックス材料科学入門』輪読会を修了

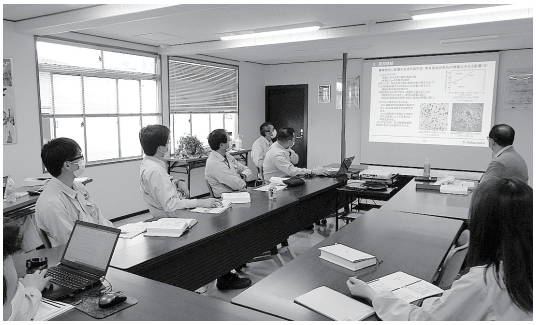
研究部は2020年１月から１年半にわたって続けてきた『セラミックス材料科学入門』(内田老鶴圃、原

AGCプライブリコ株式会社
https://www.plibrico.co.jp

本社・東日本支店　東京都港区芝４丁目１番２３号 (〒108-0014)　電話 03(3455)1796(経営管理部)
西日本支店(大阪営業所)　大阪府大阪市淀川区宮原4丁目3番7号 (〒532-0003)　電話 06(6391)9202(代表)
名古屋営業所　愛知県東海市大田町蟹田11番地4号 (〒477-0031)　電話 0562(39)4008(代表)
水島営業所　岡山県倉敷市水島川崎通り1丁目 (〒712-8074)　電話 086(447)4771(代表)
福岡営業所　福岡市中央区大名2丁目4番22号 (〒810-0041)　電話 092(712)8831(代表)

書は W.D.Kingery ほか共著『Introduction to Ceramics』)をテキストとした輪読会をこのほど修了しました。

『セラミックス材料科学入門』は「開発プロセスにおけるセラミックスの制御法を理解すること」、「経験に頼ったセラミックス技術を理論に基づいた技術に転換させること」を主眼に書かれた技術書です。本書を学ぶことで耐火物の諸性質が決まる理屈をより深く理解することが期待されました。


感染防止に十分な配慮を行いながら開催

輪読会は月 1 回のペースで研究部員 1 名がテキストを読み込み、部員の前で講義をするという形で行われ、担当者それぞれに講義資料や説明に工夫がみられました。担当者が 1 ～ 1 時間半の講義をおこない、質疑応答、フリーディスカッションに加え、講師役である前社長の坂本敏氏による解説と、開発実務にどのように活かすべきかというアドバイスがあり、理屈を深堀りするプログラムとなりました。

参加者からは、「経験に頼った開発手法に偏りがちだったが、学んだ理論を活かして効率的で効果的な開発に取り組みたい」「難解な数式や図表を理解して講義しなければならなかったので準備には大変苦労したが、学びの手ごたえがあった」「考えるときの引き出しが増えた」「学んだ数式は、どのパラメーターを変化させるとどうなるのか、この性能を上げたいときはどのパラメーターを変化させれば良いのかといった予測等に使える」などの感想が寄せられ、研究部員の意欲や意識に変化がありました。この取り組みを通して、耐火物の開発・改良において経験から学ぶこと、現場を知ることに加え理論的裏付けを部員が共有することで、仕事の質向上につなげていきます。

◇ 永年勤続社員２８名を表彰

ＡＧＣプライブリコは、６月２１日の創立記念日にあわせて、永年勤続社員を表彰し、それぞれに金一封を贈りました。

35年勤続　森 実男
30年勤続　三堀 剛
25年勤続　樋口稚徒　早野志保
20年勤続　羽根岡博司　野田 隆　中澤祥和　山形由美子　則近尚治　土屋正幸　藤井誠二
15年勤続　服部秀平　苅込泰一　星野南斗　福井 崇　武田一美　内山大輔　加藤好広
10年勤続　若杉 忍　永田庸介　服部 瞬　曽我信介　浅井 平　黒田一政　井川敬太　増子祐太
5年勤続　土肥龍太郎　眞田千馬

ビジネスパーソンのための
お薦め本・EPITOME

橘木 俊詔 著　**日本の構造50の統計データで読む国のかたち**　講談社現代新書 2609

「はしがき」から――失われた30年と称されるように、日本経済は低成長の中にいる。それは過去との比較、国際比較上からも統計で確認できるのだろうか。もしそうなら、その原因はどこにあるのだろうか。企業活動、そして労働者の働き方や生活の実態がどういう現状にあるかを知ることは、今後の経済成長の課題を考えるうえでとても重要な情報なので、本書で詳しく検討する。

例えばどのような項目が調査されているか、いくつかの例を記しておこう。企業と労働者の生産性、企業の開業率と廃業率、人々はどの産業で働いているのか、労働者は一企業に何年勤めるのか、定年制の実態はどうか、賃金や所得をどれだけ受け取っているか、女性の労働の実態はどのようなものか、日本人は幸福な生活を送っているか、そして何を生きがいにして生活しているか、など多種多様な点がわかるように記述して、日本の企業と人々がどういう状況にいるかを知ることができるようにしている。

他にも現代の日本を物語る現象がいろいろある。日本はもともと、福祉を家族の絆に頼ってきた。しかし、近年その絆が弱まり、福祉の提供が充分でなくなり、人々は日常の生活に困り果てている。例えば結婚しない人の増加、離婚する人が増えた、出生率の低下、三世代住居の減少などが象徴的である。学歴社会ともいわれる日本だが、教育においては学力不足、低所得家庭の子どもは望む教育を受けられないでいる。もし福祉と教育の分野で日本が問題を抱えているなら、政府がこれまで以上に前面に出てきて、適切な政策を実行すればある程度は解決できる。そこで政府の役割にも注目する。

「一億総中流社会」を一つの好ましい事実として誇っていた日本であったが、今や中間層が減少して、富裕層と貧困層の増加がめだつ「格差社会」に入った、との認識に合意のある時代となった。地域間格差、教育格差、医療格差なども同様である。世の中では経済効率性の達成のためには格差の存在はやむをえないとする考え方と、人間社会にとって平等は価値の高いことであるという考え方の２つが交錯している。どちらを好ましいとみなすかは、人々の生き方の違い、価値判断などに依存するので、一概に決められることではない。自由主義、民主主義のもとでは、多数決の意向で決められることかもしれない。ただ、実態を正確に知ることは、人々の判断の材料として役立つので、格差の実態がわかるようにする。

記述の方法を簡単に述べておこう。日本の社会と経済に関する項目を５０種類ピックアップして、それぞれに関して図表を提示する。その項目の内容を一目で容易に理解できるように、わかりやすい図表の用意を基本方針とした。そしてその図表をもっとわかりやすくするために、解説を準備した。

解説にあたっては、日本における過去から現在までの変遷、そして日本の位置を理解できるように、他の先進諸国との比較もできるようにした。現在の日本を相対化することによって、読者が、今後の日本はどのようになるのが好ましいのか、そして個人、家族、企業、政府の好ましい役割を具体的に判断できるような資料になるよう配慮した。なお、本書で紹介したデータはできるかぎり最新のものを取り入れたが、一部校正作業中に最新版が発表されたものなど取り入れられなかったものもある。ただ、大きな流れに変わりはなく、全体としての傾向を読み取っていただければ幸いである。

株式会社講談社　2021年3月20日第1刷発行。講談社現代新書『日本の構造　50の統計データで読む国のかたち』の「はしがき」から抜粋。著者の橘木俊詔（たちばなき・としあき）氏は1943年、兵庫県生まれ。小樽商科大学、大阪大学大学院を経て、ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士課程修了(Ph. D)。京都大学教授、同志社大学教授を歴任。現在、京都女子大学客員教授。元日本経済学会会長。専門は経済学、特に労働経済学。主な著書に、『日本の経済格差』（エコノミスト賞受賞）、『家計から見る日本経済』（石橋湛山賞受賞）、『格差社会』『新しい幸福論』（以上、岩波新書）、『「地元チーム」がある幸福』（集英社新書）ほかがある。本書は、わかりやすいグラフや表にまとめたデータから日本の現状を読み解いた、おすすめの一冊。254頁、価格900円＋税。

神川 龍馬 著　京大式 へんな生き物の授業　朝日新書 808

「まえがき」から――この本を手に取っていただいた方の中で、「将来も不安だし、何か変わらなければ」「進化(成長)したい」「でも周りと違ってしまうのは嫌だ」

といった悩みをもっている人がいるのであれば、むしろ人間の世界ではなく「ある世界」を覗(のぞ)いてみることをお勧めする。

目に見えない世界である。(中略)

それはあなたの顔の上にもある。おなかの中にもある。家の周りの水の中にもある。通勤途中の花壇の土にもある。

そう、ここで言っている目に見えない世界とは、目に見えないくらい小さな生き物、単細胞の生き物の世界である。このような目に見えない生き物を我々は微生物と呼んでいる。

目に見えない生き物は数が多く、そして我々の身近に存在する。地球は単細胞の生き物の世界といってもいいだろう。

そんな目に見えない生き物が、我々が毎日吸い込んでいる空気1リットルあたり10細胞くらいはふわふわと漂っているようである。汚いわけでなく、それが普通であるし、普段ならば健康に暮らしていくことができる。

そんな単細胞の生き物について、いったいどんなイメージをもっているだろうか。

辞書によれば、単細胞とは以下の通りである。

①単一の細胞。⇔多細胞。

②転じて、考えの単純な人。

①はそのまま文字の通りである。しかし②が解せない。「転じて」、ということは「単一の細胞＝単純」、というイメージではないか。おそらく、他人や自分を少々おとしめる際に使用されると推察されるがとんでもない。

人間は、確かに地球上で繁栄している。高等生物などといった言葉に代表されるように、大きな脳をもち、複雑な機能をもつ臓器によって生命を維持している。もしかしたら、そのような身体的特徴から、複雑→高度なシステム→高等な生物というイメージになるのかもしれない。

でも、あえて言おう。

人間は単細胞の生き物よりもえらいわけでも立派なわけでもない。

単細胞の複雑な「中身」は、人間の細胞と同等かそれ以上なものもたくさんいる。そしてその生き方も多様で複雑である。

他者から栄養を奪うものや、自分よりもずっと大きな生き物と共生しているもの。単細胞の者同士でせめぎあい、そして生きていく活動の中で雲を作り上げるもの。そして自らの細胞からミサイルを発射する生き物や、人間と同様に性をもつ単細胞の生き物もいる。

人間がえらくて立派であれば、単細胞の生き物たちも十分すぎるほどえらくて立派なのである。(中略)

彼らに我々の常識は通用しないし、我々の思い込みも関係ない。彼らのもつ生存戦略は、時に巧みに見えて、時に脆(もろ)く、時に儚(はかな)い。助け合っているように見えたものが、突然助け合いをやめてしまったり、敵同士になったりする。それだけではなく、生き方そのものを劇的に変えてしまうものもいる。

このような変化が子孫に受け継がれていくことを進化と呼ぶ。ただし、微生物は何かを狙って進化しているのではない。「将来も不安だし、何か変わらなければ」、「進化(成長)したい」、「でも周りと違ってしまうのは嫌だ」などと考えることなく、微生物はノープランで進化し続けているのである。

そんな“へんな奴ら”は、常に我々の周りに存在する。いわば地球という家に共同生活する同居人である。一つ屋根の下に暮らす同居人がどんな生き方でどうやって成功し、失敗してきたのか。それらを知ることは「何かに役に立つ」というよりもむしろ「知っておくべきこと」である。

へんな生き物の世界を知ることは、様々な悩み多き人の視野を広げてくれるはずである。

さあ、覗いてみよう。目に見えない世界と彼らの進化を。

株式会社朝日新聞出版　2021年3月30日　第1刷発行。朝日新書『京大式 へんな生き物の授業』の「まえがき」から抜粋。著者の神川龍馬（かみかわ・りょうま）氏は1981年、静岡県生まれ。京都大学農学研究科准教授。日本藻類学会研究奨励賞、日本進化学会研究奨励賞、文部科学大臣表彰(若手科学者賞)、公益財団法人農学会日本農学進歩賞受賞。主な研究領域は、海洋における真核微生物の多様性について。本書は、いわばノープラン戦略で進化してきた微生物の世界を知ることで、視野が広がるおすすめの一冊。216頁、価格790円＋税。

今井 むつみ 著　　英語独習法　　岩波新書 1860

「はじめに」から――本書の読みかた、使いかた

本書は、2018年度のＮＨＫラジオ講座「入門ビジネス英語」のテキストに１年間連載したエッセイを再編成し、大幅に加筆したものである。(中略)

第１章は記憶や情報処理のしくみが英語学習にどうかかわるかを述べている。拙著『学びとは何か』(岩波新書)や認知科学の他の書物を読み込んでいる人には、前置きが長すぎると感じられるかもしれない。そういう方は第１章を飛ばしながら読んでもかまわない。

第２章は本書でもっとも大事な認知科学の概念である「スキーマ」を紹介する。その材料として、可算・不可算の文法を取り上げている。可算・不可算よりも、名詞、動詞、形容詞の語彙を増やすことが先決、という方は、第２章を流し読みしてもよいと思う。ただし、「スキーマ」は本書の核となる概念なので、この概念を熟知していない読者には読んでいただきたい。この概念に初めて触れる読者にとって、「スキーマ」という概念は抽象的で、最初はよくわからないという印象をもつのではないかと思う。しかし、その後の章でいろいろな例が出てくるので、多少我慢して読み進めていただくうちに、だんだんと理解していっていただけるはずだ。

第３章は英語でアウトプットする際に単語や文法を自在に使いこなすためには、どのような知識が必要かを述べている。言語を使うときに必要となるほとんどの知識は、知っていることが意識されない暗黙の知識――スキーマ――である。そのスキーマがどのような要素から構成されているかをみていく。

第４章は英語を自在に操るために必要なスキーマの中で、日本語と大きくズレているものを取り上げ、日本語を母語とする学習者が日本語に対してもつスキーマが、英語で必要なスキーマの習得にどのように影響するかを述べる。続く第５章では、マニュアルがなくても簡単に使える無料のオンラインツールを利用して、英語特有のスキーマを探索する方法を紹介していく。

第６章では、英語スキーマの探索をさらに深く進めていくために、Corpus of Contemporary American English(**COCA**)という、言語の研究者も使う本格コーパスと、単語同士の関係にフォーカスした拡張版英英辞典ともいえる、**WordNet**というオンラインデータベースを紹介する。(中略)

多聴や多読のことがまず知りたい、という方は第７章、第８章から読み始めても OKだ。第９章ではスピーキングとライティングのときの情報処理のしくみの違いに着目して、スピーキングとライティングはどのような順番でどのように学習を進めていくと合理的なのか述べていく。

そして本篇の最終章となる第10章では、赤ちゃんのときから始まる母語の学習と、母語を習得した後の外国語学習のメカニズムの違いを考慮し、認知的に合理的な学習について俯瞰的に述べる。

理屈はいいから、まず英語力の腕試しをしてみたい、という方は、「探究実践篇」から読み始め、課題を探究してから本篇に戻ってもよい。(中略)

言語の学習に終わりはない。新書１冊で英語の(そして言語の)奥深さのすべてを伝えることはもちろんできないし、本書を読むだけで読者が英語の達人になれるとか英語がペラペラになる、などという非現実的なことは言わない。しかし、読者が奥深い世界に分け入り探索していくための第一歩を踏み出すお手伝いとして、またその後の長い道のりの道しるべとして、本書がお役に立てればうれしい。

株式会社　岩波書店　2020年12月18日　第1刷発行。岩波新書『英語独習法』の「はじめに」から抜粋。著者の今井むつみ（いまい・むつみ）氏は慶応義塾大学環境情報学部教授、専攻は認知科学、言語心理学、発達心理学。著書に『ことばと思考』『学びとは何か―〈探究人〉になるために』（以上、岩波新書）、『ことばの発達の謎を解く』（ちくまプリマー新書）、『親子で育てる　ことば力と思考力』(筑摩書房)ほかがある。本書は、日本語と外国語の「スキーマ」の違いにスポットを当て、認知科学の視点から英語学習をひもといたおすすめの一冊。278頁、価格880円＋税。

(編集後記)

○……オリンピックが開幕し、トップアスリートの驚異的なプレーを見るたびに、彼らの努力という言葉では言い表せない驚異的な鍛錬の積み重ねを感じ、目標に向かいやり切る人の強さに感動しています。舞台は違えど、普段の仕事の地味な努力も侮れないと身の引き締まる夏になりました。